

『情報論から見た中国の「一帯一路」国際貿易政策』

中川十郎

名古屋市立大学 2 世紀研究所特任教授、一帯一路日本研究センター副代表

国際アジア共同体学会学術顧問、日本ビジネスインテリジェンス協会理事長

1. 『一帯一路の現状と、日本における批判』

1) 中国の野心的な「一帯一路」に関しては 2013 年の習 近平国家主席のカザフスタン、インドネシアでの発表以来、かつて商社に於いて 20 年間 8 カ国に海外駐在し、国際マーケティング、国際市場開拓に尽力。その後、大学へ転身、30 年以上国際マーケティング、グローバル市場開拓の学術研究、教育に従事してきた者として関心を抱き研究して来た。

また 10 年前から名古屋市立大学 22 世紀研究所特任教授として未来予測を研究してきたが、実務、理論の両面から中国の「一帯一路」戦略は 21 世紀の国際市場戦略として画期的なグローバル戦略だと筆者は評価している。

2) すなはち 19 世紀のパクスブリタニカ、20 世紀のパクスアメリカーナに次ぎ 21 世紀はパクスアジアーナ、パクスチネーゼ、パクスインジアーナの時代が到来することは確実とみられる。その主要市場はユーラシア大陸が主戦場になることは人口、資源、物流上も自明である。

急速に衰退しつつある日本にとって、発展しつつある一衣帯水の中国の世界市場戦略の「一帯一路」。その金融機関たる「アジアインフラ投資銀行」への参加が日本生き残りのためにも必須である。

しかるに最近の日本企業、経団連、日本政府の中国敵視政策は上記の動きに逆行しており、米国の中国敵視政策に迎合し、問題である。

3) 早急に日本独自の 21 世紀の通商政策を確立することが喫緊の課題であろう。しかるに日本のメディアには中国の「一帯一路」に対する批判が横溢しており、時代の趨勢に逆行していることは誠に慙愧に耐えない次第だ。将来の発展センターたるアジア、ユーラシア大陸での「一帯一路」への日本の積極的な前向きな対応が強く求められている。

4) 「一帯一路」に対する最近の日本のメディアの批判を以下例に挙げる。

『選択』24 年 5 月号での論評は下記通りだ。

『中国「巨大事業」は頓挫だらけ～『東南アジア「一帯一路構想」の大嘘』。「施工率は 3

割台だ」と報じ批判している。(『選択』24年5月号36ページ)

中国~ラオス鉄道では総工費60億ドルだが、ラオスでは3割負担で19億ドルはラオス経済にとって大きな負担だ。『一方、タイにとっては、習政権が仕掛ける「債務のワナ」がどんな結果をもたらすかは、すぐ北隣のラオスではっきり見ることができる』(同上36ページ)。『習政権の空虚なメガプロジェクトは彼らの言う「人類運命共同体」にたとえようのない損失を生み続けているようだ。』(同上37ページ)

一方、『新財界往来』24年5月号は『「一带一路」中国の矛盾』、「大陸国家と海洋大国、二兎を追えば破綻する」と見出しを付け、『共産党政権の強権統治の遺伝子を持つ中国は公共性の強い海洋をも大陸的発想で統治しようとする。この手法そのものがすべての国に開かれた海洋を持つ「自由の海」という魅力をそぎ落していることに気が付かない「中国の悲劇」が存在する。』(同誌55ページ)。実態をしっかりと見極めることが肝要だ。

9月刊の『中国経済「6つの時限爆弾」』産経新聞特別記者 田村秀男 著、かや書房の表紙帯に『習近平が執念を燃やす「一带一路」は水泡に帰す』と断言。さらに中国経済について、「不動産バブル崩壊から金融危機へ」、「偽りのGDPと需要無視の過剰生産」、「グローバル貿易戦争で窮する中国」、「激化するモノの消耗戦争が中国を自爆させる」、「脱ドルは自爆への道」、「台湾進攻の結末は習近平体制崩壊」と独断している。

5) 「他人のふり見て我が身を振り返れ!」。日本は90年代のGDP世界第2位から2025年にはインドにさえ抜かれ、世界5位に転落するという。

2024年のGDP一人当たりランキングはカリブの島国プエルトリコ(30位)、バハマ(32位)、アジアのブルネイ(33位)、隣国の台湾(34位)、韓国(35位)さらにスペイン(36位)、東欧のスロベニア(37位)にも抜かれ38位に落ち込み、G7、先進国でも最低で、恐るべき低落ぶりだ。

さらに世界購買力で比較すると、青山学院大学・羽場久美子名誉教授の資料によれば、2022年で1位は中国、2位米国(米日のGDPの合計に匹敵)、3位、インド(日本の2倍)、4位、日本(中国の5分の1、インドの2分の一だ。東海の小島で自己満足し太平洋の夢をむさぼっていると、GDP一人当たりで50位で発展途上国なみのGDPに落ち込むのは時間の問題だろう。日本政治、財界、教育界の猛省が強く要請される。

2. 「一带一路の源流；シルクロード」

「一带一路」をよりよく理解するために「一带一路」の源流たる「シルクロード」を一

瞥しておきたい。

- 1) 後漢とローマ帝国を結んだシルクロードは中国と西アジア、地中海地方を結ぶ、「オアシスの道」は中国のシルクを運ぶ重要ルートでこれが「シルクロード」の源流となった。このようにして、東から絹や工芸品、西からは宝石、ガラス器、貴金属などが運ばれり、東西文明の交流幹線となった。
- 2) 後漢は西域50余国を服従させ、シルクロードの大部分を制し、ローマ帝国とは陸のシルクロードのみならず、海のシルクロードも開発され、ローマ帝国との海上交易も活発となった。
- 3) これが習近平・中国国家主席が2013年以来、10年以上にわたり、注力している「一帯一路」、「運命共同体」戦略の源流で、「一帯一路」は、西暦2世紀以来2000年の歴史をもつ歴史的広域世界貿易戦略である。
- 4) 22世紀には、21世紀前半の「中国の世紀」、21世紀後半の「インドの世紀」、さらには22世紀の「アフリカの世紀」に備えた中国の世紀をまたぐ遠大なグローバルな広域貿易構想で、日本も太平洋の小島から批判ばかりしないで、21世紀、22世紀のグローバル貿易戦略、人類運命共同体戦略に積極的に関与することこそ肝要だ。
- 5) 中国は2018年以来コロナもあり途絶していた「中国。アフリカ協力フォーラム」を北京で9月4~6日開催。習主席は未来の大国アフリカの開発援助などに今後3年間で、日3600億元(日本円換算約7兆円)の支援を表明。アフリカの取り込みに注力している。アフリカ54カ国中、台湾と外交関係を結ぶ、エスワティニ(旧スワジランド)を除く53カ国が参加。同フォーラムは2000年に発足。今回の首脳会議のテーマは『手を携えて現代化を推進し、運命共同体を共に築く』であった。
- 6) 習主席は中国とアフリカの関係を「新時代の全天候型の運命御共同体」に高めると宣言。『「グローバルサウス」の現代化の波を起こす』と強調。世界で力を増しつつある「グローバルサウス」との協調関係強化唱えた。
- 7) 日本も2025年に3年ぶりに横浜で「TICAD」(東京アフリカ開発国際会議)を開催するが、中国と対抗するのではなく、中国と協力しつつ22世紀の大国成長するアフリカでの日中協力の模範を示すべきではないか。しかしながら日本のメディアは「習氏、アフリカ支援減額、3年500億ドル、焦げ付き警戒(日経9月6日)と相も変わらず、中国批判の記事で横溢している。

3. 陸のユーラシアと海洋国家との対立

- 1) 地政学の祖・ハルフォード・マッキンダーは「世界を動かすのは、イデオロギーではなく、資源と戦略的要地への欲求である」と名言を吐いている。

中国は現代のシルクロード世界戦略「一帯一路」構想で現代的な鉄道網、高速道、海上航路、北極海航路開発、さらには航空路線、衛星北斗による衛星通信網などによる、21世紀、22世紀に発展するユーラシアの陸海空による長期物流戦略を推進中である。中国政府は21世紀のシルクロード（中央ユーラシアの陸路とユーラシア南沿いの航路）による中国とヨーロッパを結ぶ「一帯一路」を2035年までの実現を目指している。

- 2) 中国の「一帯一路」政策は主要65カ国にまたがり、世界人口の60%、世界GDPの3分の2を占める「大経済圏」構築を目指す、壮大なプロジェクトである。（『ユーラシア帝国の地政学』宮崎正勝（PHP））

- 3) 「一帯一路」は過去の人類の歴史を形成してきたユーラシア大陸に、21世紀に発展する東南アジア諸国、21世紀前半に発展する中国、後半のインド、22世紀に発展するアフリカが関係するランドパワー諸国である。21世紀は欧米のシーパワー国からアジア、ユーラシアのランドパワー諸国が発展する世紀である。

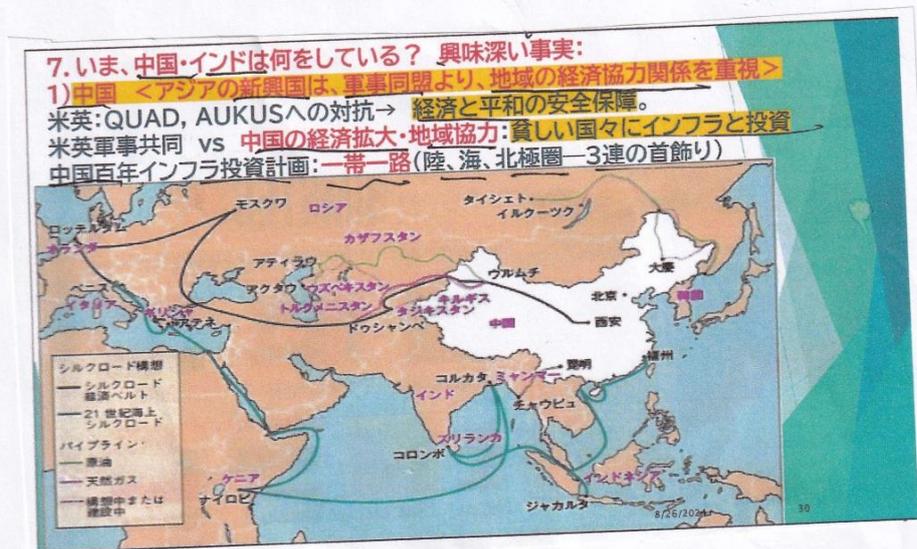
- 4) このような歴史的背景を踏まえてわが日本としても中国、インド、中東、アフリカ諸国との関係強化に努力すべきだと思われる。

- 5) 米国の中国封じ込め的な経済安全保障政策やWTOの貿易規則にも反すると思われる極端な高額輸入関税、中国製EVに対する差別的な高関税政策は世界の物流を阻害すると思われる。

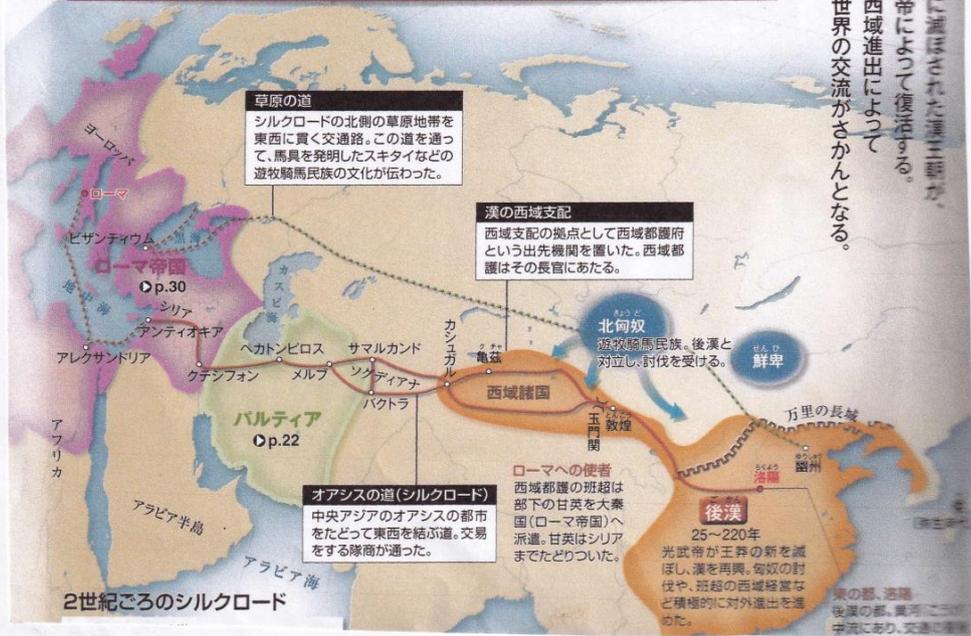
- 6) 日本の最大の輸入相手国である一衣帯水の中国との経済・文化面での協力を遺隋、遣唐使交流以来の2000年の歴史をふまえ、今こそ、米中対立の緩和に尽力することこそ、太平洋戦争後の戦後の平和を希求する日本の役割ではないか。

- 7) 聖徳太子の「和をもって貴しとなす」の精神で日中関係改善、日中友好関係強化に今こそ日本は率先して立ち上がるべきであろう。そのためには中国と協力し、中国の世界貿易経済文化戦略構想の「一帯一路」への協力、その融資機関たる「アジアインフラ投資銀行」へ率先して参加するなど思い切った経済政策が求め

られる。それがとりもなおさず、低迷、衰退しつつある日本の再構築の要だ。-



東西を結ぶシルクロード

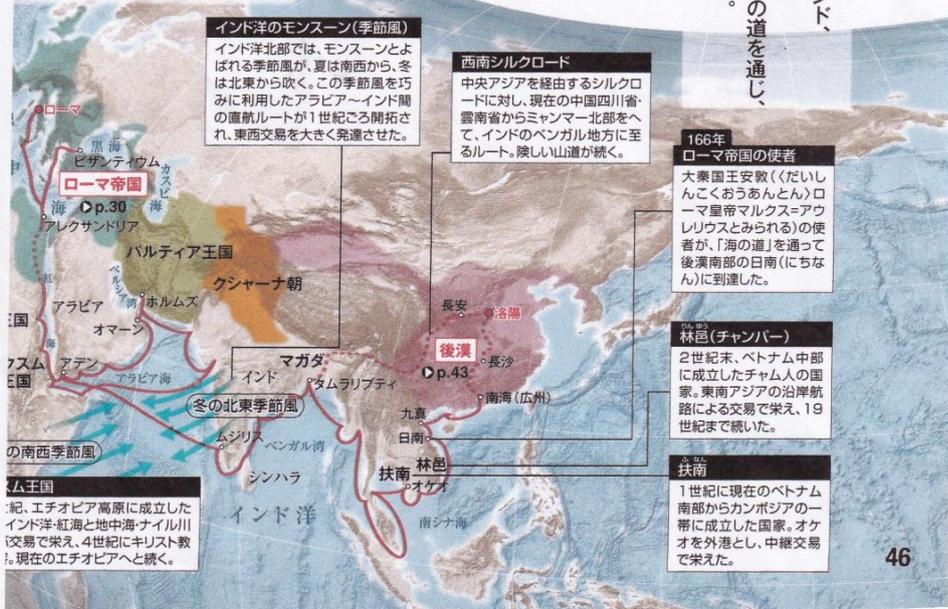


王莽に滅ぼされた漢王朝が、光武帝によって復活する。漢の西域進出によって、東西世界の交流がさかんとする。

海のシルクロード

紀の海のシルクロード

利用したインド洋航路の開通によって、ユーラシアの東と西を海路で結ぶ「海のシルクロード」が生まれた。アラビア半島からもたらされた乳香などの「道の」、12世紀以降には、中国の陶磁器が「道の」ともよばれた。



アフリカ、アラビア、インド、東南アジア、中国などの交易圏をつなぐ壮大な海の道を通じ、東西の諸文明が交流した。